

エピソード ● それから

ひいお祖父さんの道具箱には、カンナやノコギリやノミがいっぱい入ってた。

カンナだけでも大きいのが小さいの、いろんなかたちをしたのも合わせて、十個以上もあつたんで、ぼくはびっくりした。職人は長いあいだ木工の仕事をしているうちに、それぞれ使いやすい大きさをかたちのものを自分でつくるんだぞうだ。

それはいいけど、だんだん心配になってきた。

だってリーリったら、砥石を見つけたら、ほんとうに道具を研ぎはじめたんだもの。山の家には泊まらないって言ってたのに、このようすじゃ夜中までかかるんじゃないかって思ったんだ。

でも、カンナの刃を三つぐらい研いでから、リーリは満足したように言った。

「まだ充分に使えないぞ。あと使つてきな、じつじつぐり研ぐべからぬぞうだ。」

山の家にあつたのは道具だけじゃない。あとで見せられたんだけど、家の裏に背の

「なあ、真也くん。……リーリは、これからしばらく山の家へ通うことになる。ほんとほエーバも連れて引越したいんだけど、あそこの暮らしはエーバにやつらいだろつから、リーリだけで通つつもりなんだ」

塩尻駅で特急列車に乗り換えたあと、とつぜんリーリが言いだした。

「それでだね、リーリが留守のあいだだけ、きみの家にエーバを泊めてくれるようにママに頼むけど、真也くんも、いろいろ気をつけてやってくれんかなあ」

「うん、まあいいよ」

ほくは、すぐに答えた。せめてエーバがいてくれりゃ、淋しくない。それに、二人人が引越しちゃうわけじゃないとわかって、ほっとした。

そのあと、リーリは真剣な顔つきで言ったんだ。

「わたしはね、ひいお祖父さんの仕事を引き継ぐつもりと思ってるんだ」

まるで大人を相手にしているような話し方だった。

「この年になって、ぶいおまでやれるかわからないけれど、挑戦してみたいんだ」

「うん。……がんばって」

ほくには、それっきゃ言うことができなかった。

でも、胸のなかにゃ、もっと言いたいことがつまってた。——年なんて関係ないだろ。リーリは、まだまだ元気なんだ。もっともって生きるんだからね。それに壊れたベンチなんかも、ちゃんと直したじゃないか。いまからだって、立派にやれるさ。

でも、とっても生意気みたいなんで、それを口にするのはやめたんだ。だいじょうぶだつてば、リーリ。ほく、マジに信じてんだから、ほんと。

東京へ帰ったら、あんなに積もった雪が、だいぶとけてた。

つぎの朝、始業式のあと校庭へ行くと、グラウンドのコンディションがよくないから、サッカーの練習はお休みだつて。なんでだよ、泥んこになつてもいいから練習やろうよ。みんなで、コーチに言いに行つたけど、やっぱりだめだつてさ。

しかたないから解散したあと、ほくはリーリとエーバのとこへ行つたんだ。そして、なんとリーリがキッチンの隅で、パソコンに向かつてるじゃないの。

びっくりしてたら、おかしくてたまらないつて顔でエーバが教えてくれた。

「あれ、ゆうべ、お二階の近藤さんが持つてきてくださったのよ」

ぜひとも使ってほしいつて、無理やり置いてつたんだつて。なんでも、だいぶ前に自作したパソコンに手を加えて、ちゃんと使えるようにしたんだそうだ。そういえば近藤さんはプロのプログラマーだつて聞いたことがあるけど、きつと椅子を直してもらつたお礼のつもりなんだろう。でも、リーリに使えるんかなあ。

「まいつたな。このキーボードとかマウスとかいうもんじゃ、てんで歯が立たんよ」
思つたとおり、リーリが溜め息をついた。もう二時間以上も苦戦してゐらしい。

「なんでも、このなかにゃホームページというのが入つてゐるんだそうだ。電源を入

れてマウスでダブルクリックとかいうのをすりゃ、すぐに画面が出てくるって言うってだけだな」

「どうやら近藤さんは、だれでもパソコンを操作できるもんだって思い込んでるらしい。でも、そりゃないでしょ。井上木工所のオフィスにもパソコンはあったようだけど、じっさいに使ってたのは秘書のお姉さんだったみたいだからね。」

そこで、ぼくがかわりに動かしてあげることにした。パソコンなんてパパやママのやってるのを見ながら育ったんだし、いまじゃ教材ソフトを使って勉強してるもんね。デスクトップに、葉っぱの茂った木のアイコンがあった。その下に「家具修理店」と書いてある。ははあ、これだなんて、すぐわかった。そいつをクリックすると、あらわれたんだよ、「井上さんの家具修理店」っていうホームページがね。

びっくりしたリーリが、なんだ、こりゃ、って大きな声をあげた。

ぼくはかまわずに、トップページにならんだ目次を眺めた。

- 1 ↓ 修理をご希望の方へ
- 2 ↓ お見積もりと必要な資料
- 3 ↓ 修理の方法
- 4 ↓ 修理の期間
- 5 ↓ 代金のお支払い方法
- 6 ↓ 店主のプロフィール

ために1のところをクリックしてみたら、「まずはメールか電話かお手紙で、お気軽にお問合せください」と書いてあるだけで、空いたところは「工事中」になっていた。

「ねえ、リーリ。……これって近藤さんがつくってくれたテスト版だよ、きつと」
「そっだ、これでよかったら、あとは相談しながらつくるって言うてたっけ」

リーリは、まだ理解できないって顔つきだったけど、ぼくにはわかった。近藤さんが、リーリを応援してくれてるんだ。すごいプレゼントじゃないの。

あのかい人が、身体に似合わない気のきいたことをするんだな、とぼくは思った。
「ネットで公開したら、修理の注文がいっぱいくるかもしれないよ」

「なあ、真也くん。公開って、どうするんだね？」

「まず、このパソコンにインターネットをつなげて、ケーブルとかADSLとか常時接続のプロバイダと契約して、メールアドレスとURLを登録するんだけど」

ぼくの知ってるだけのことを、なんとか説明しようとしたけど、これがぜんぜん通じないんだ。へええって、ぼくの顔をリーリとエーバが感心したみたいに見つめてさ。

「真也くんは小学生なのに、よく知ってるんだなあ」

「ほんと、こないだまで、おむつをしてたくせにねえ」

そんなことを言い合っちゃって、てんで理解しようとしなんだよな。
だめだ、こりゃ。きつと近藤さんも、あきれちゃうにちがいない。

「リーリは山の家へ通うことにしたんだよね。それじゃ修理の注文がきてもしようがないじゃこ」

どうせダメなら、早めに近藤さんへそっ言ったほうがいいだろう。そのほうが、近

藤さんにも、注文してきたお客さんにも迷惑がかからないんじゃないかなって思ったんだけど、

「そつだ。井上木工所をやめてもらった職人たちに声をかけてみよう。あの人たちや、いいアルバイトになるかもしれないぞ。どうだね、エーバ？」

「そつですね。また、みんなで働けるようになるかもしれないですね」

リーリとエーバは嬉しそうに笑って、なんともうなずき合ってる。

じゃあ、だれがパソコンで注文をチェックするんだよ。まさか、ぼくに押しつけるつもりじゃないだろうな。ねえ、ぼくはサッカーと勉強で忙しいんだからね。

つぎの日もサッカーの練習は、お休みだった。

このごろ、どうもコーチはやる気がなくなってきたみたいだ。せつかく、ぼくがレギュラーになったってのに、こんなじゃ試合に勝ってこないよ。しかたないから、せいぜい自主下しでもやっこがなげや。

午後、アパートまでランニングしていった。玄関のチャイムを押すと、いつもならエーバが出てくるのに、なぜかドアを開けたのはリーリだった。

「いま、エーバはパソコンの勉強中なんだよ」

リーリが、ちょっと顔をゆがめて見せてから、テーブルのほうへ目をやった。パソコンに向かっていたエーバが、こつちを見て楽しそうに笑いかけてきた。

「ねえねえ、真也くん。どこでしすんのぉ？」

なんて、同級生の女の子みたいな声を出して呼ぶんだよ。なんか、いつものエーバじゃないみたいで気味わるくなった。いったい、どうしたんだよ。

「昨日、あれからエーバがかわって、あそこに腰かけたんだ」

リーリが苦笑いして教えてくれた。

「それっきり面白がっちゃって、夜になっても動こうとしないんだよ」

おかげで夕ご飯は、ありあわせのつくだ煮と梅干しで済ませられちゃったんだそう。エーバは、どうやらハマっちゃったみたい。キーボードだって両手の人さし指でポツンポツン叩いてさ、てきとうにワードで文を書いたりしてんだから、びっくりしちゃうよ。

「さっき近藤さんが覗きに来て、さっそくインターネットができるようにしてくるって言うってたよ。このアパートにや、そのための回線が入ってるんだそうだ」

リーリは、もうパソコンをエーバにまかせちゃった気らしい。

でも、エーバに頼まれてフォントの換え方を教えてたら、もういいかげんにしてくれ、とでも言いたそうに声をかけてきた。

「なあ、真也くん。これから散歩に行くんだが、一緒にどうかね」

ぼくは、すぐ賛成した。このまんまエーバに付き合ったら、夜まで家へ帰れなくなっちゃうそつだ。ぼくにだって、やらなきゃなんないことがいっぱいあるんだ。

「じゃあね、エーバ、がんばって」

ぼくは、リーリを追いかけて大急ぎで外へ出た。

駐車で待っていたリーリが、コートの襟を立てて歩きたしなから、

「エーバにも夢中になれるものができて、よかったよ」

ぼくを振り返って、そう言った。

「これから真也くんがパソコンの先生になってくれれば、エーバも大助かりだ」

「先生だなんて、やなことだ。ぼくだって、そんなに知らないんだから」

「まあ、そう言っただよ。……たよりにしてるからさ」

リーリの背中が揺れてて、笑ってるのがわかった。なんとなく、からかわれてるみたいな感じだったんで、ぼくは、ちょっとふくれてしまった。

「どうだね、ひさしぶりに湧水公園を通っていいこうか」

リーリとぼくは道路を横切って公園の入り口へ向かった。低い棒杭のならんでる公園内にや、いろいろな木が茂ってるせいか、まだたくさん雪が残ってる。土の見えるところはぬかるんでて、かなり歩きにくそうだった。

「おそっよ、リーリ、靴が泥だらけになるからさ」

「おいだよ。……あそこに突っ立ってる」コンクリートの建物を見たいんだ」

「それって、給水タンクのことっ」

「そっか、あれは給水タンクなのか。なるほど、やっとわかった」

水道のための湧き水をくみ上げるものだったこと、いままで知らなかったんだってさ。リーリも、いい年して、あんがい知らないことがあるんだな。

教えてあげて得意な気分になったら、さっきふくれたのを忘れてしまった。もう靴が泥んこになったっていいやって、ぼくもどんどん歩いてった。

「ぼく、見てごらん……。」「ナラの枝……。」「もうこんなに冬芽がふくらんでる。リーリが、そばに立ってる木を指さして言った。

いままで気がつかなかったけど、細い枝の先っぽに赤茶色のかたまりが、いくつも見えた。なんか、いまにも小さな葉っぱが出てきそうな感じだった。

「木は、えらいよな。冷たい雪のなかでも、ちゃんと春を迎える準備をしている。リーリがつぶやくのを聞いて、ぼくも自然にうなずいてた。

給水タンクの見えるところまできて、リーリが足を止めた。

「ちゅっと待ってくれよ……。」「い、あ、聞いてえなかったか……。」「ふいに声を低めて言ったあと、まわりを見まわしはじめた。

ぼくは、くびをかじげながら突っ立ってた。そう言われれば、なんか聞こえたような気がした。すぐ近くで、だれかが哀しそうな溜め息をついたみたいだった。

リーリがロープを張った樺杭の方向を指さした。

そこには背の高い草が茂っていた。ぼくへうなずいて見せてから、リーリがロープをまたいだ。とたんに草がさわめいた。なにかがひそんでるようだ。リーリが近づい

ていくと、ふいにクーンって子犬のなく声がしたんだ。

「おやお、逃げなくていいんだよ。いじめたりやしないからな」

リーリがしゃがんで、草のなかへ両手を突っ込んだ。

「おお、いい子だ。そうだ、そうだ、おとなしくしてよ」

草やぶのなかから出てきたのは、白っぽい小さな犬だった。これほどやせた犬は見ることがないってぐらい、ひどくやせ細ってた。怯えた目をして、全身をぶるぶる震わせてる。くびに青いビニールひもが巻きついてて、抱き上げたリーリの腕から地面へ長くたれてた。

「生後六カ月ぐらいかな。そのわりに小さいのは、ろくに食べてないからだろう」
ロープをまたいで戻ってきたリーリが、抱いてた子犬を地面に下ろした。

犬は逃げもしないで、後ろ足のあいだに細い尻尾をはさんだまんま、リーリの足もとにはいつくばった。震えながら、甘えるように身体を揺すってる。たすけて、いじめないでよ、おねがい。そう言ってるみたいだった。

「じじは、そつとつうつらい目にあってきたようだな。そのへんの、わるい子たちがビニールひもでつないで、引っ張りまわしたんだろ」

「可哀な子……」

ほくは子犬の背中をなでてやった。てのひらに硬い背骨や肩骨がさわった。まるで刺さってくるみたいだった。あんまり可哀そうなんで、涙がこぼれそうになった。

「どうだ、こいつに飯を食入させてやるかねっ」
 リーリが、ぼくをまっすくに見しめて聞いてきた。

「家へ連れてって、飼ってやる気はあるかじっ」

「あつたりまえたよ。こいつは、もうぼくの犬なんだもん」

ぼくは、子犬を抱くようにして答えた。

リーリばかりでなく、パパやママにでも、そう言うつもりだった。

「そっか。それじゃ、リーリも応援してやみじ」

「ほんと、ママに頼んでくれねえっ」

「かなり反対されるだろうけど、苦しい闘いはかへこのうまだ」

リーリが大きな声で宣言したんで、ぼくにも勇気がわいてきた。

二人は犬を連れて、ぼくんちへ向かった。途中で、リーリが作戦をたてた。

「いいかい、この犬は、いまからチビっていう名前にするからな」

「ええっ、あのチビと同じ名前っ」

これにや、ぼくは抵抗があった。だって、そうだろう。こないだ死んだばかりの友だちの名前を、そのまんま付けるなんてさ。だいいち、チビにも、この子犬にもわるいじゃないの。

ところが、リーリは厳しく顔で言い張るんだ。

「これが作戦なんだよ。……パパもママも、チビって名前にゃ弱いはずだからな」

「なるほど、そうか。あんがいリーリって、わる知恵も働くんだね」

「リーリ、人をみくびつちやいかんよ」

リーリは、ことごと胸を張って言った。

二人は笑いながら、小川にかかる木橋を渡った。

新しいキビは、いっのまにか腰をゆるめ、嬉しそうに足踏りしてゆく。